

# PATENT ABSTRACTS OF JAPAN

(11)Publication number : 62-127976

(43)Date of publication of application : 10.06.1987

---

(51)Int.Cl.

G06F 15/62

H04N 5/76

---

(21)Application number : 60-268694

(71)Applicant : KYOCERA CORP

(22)Date of filing :

29.11.1985

(72)Inventor : TAKEDA SHIGEKI

---

(54) IMAGE RECORDING PROCESSOR

(57)Abstract:

PURPOSE: To eliminate the need for the focusing of an optical system and to simplify image pickup operation by using a correction function having a reverse characteristic to a point spread function due to out-of-focusblur or aberration based on an image signal to apply arithmetic processing and restore an image.

CONSTITUTION: An image pickup element 2 is an image pickup photoelectric conversion element fixed on an infinite focus of a lens 1 and the fixed focus system is adopted for the optical system comprising the lens 1 and the image pickup element 2. A RAM 3 includes a memory storing an image input by one image and a main memory 6 transfers and stores image information stored temporarily in the RAM 3. An arithmetic processing section 5 applies the arithmetic processing so that the image information stored in the main memory 6 is an objective image and the result of the arithmetic processing is stored in the main memory 6. The data transferred from the RAM 3 to the main memory 6 is subjected to the arithmetic processing by using a correction function having a reverse characteristic to a point spread function due to out-of-focusblur or aberration based on the picture signal stored in the storage section at the arithmetic processing section 5 and the image is decoded.

## ④ 公開特許公報 (A) 昭62-127976

④ Int. Cl.

G 06 F 15/62  
H 04 N 5/76

識別記号

序内整理番号

6615-5B  
Z-7423-5C

④ 公開 昭和62年(1987)6月10日

審査請求 未請求 発明の数 1 (全12頁)

## ④ 発明の名称 画像記録処理装置

④ 特 願 昭60-268694

④ 出 願 昭60(1985)11月29日

④ 発明者 武田 重喜 東久留米市前沢4-32-21

④ 出願人 京セラ株式会社 京都市山科区東野北井ノ上町5番地の22

④ 代理人 弁理士 井ノ口 露

明細書  
1. 発明の名称 画像記録処理装置

## 2. 特許請求の範囲

撮影用レンズと、前記撮影用レンズからの光信号を光電子変換して直角信号を生成する撮像素子と、前記撮像素子からの直角信号を記憶する記憶部と、前記記憶部に記憶された直角信号に基づいてピントがあるいはブレあるいは収差による点広がり関数の逆特性を有する直角関数を用いて演算処理して直角を復元する演算処理部とから構成した画像記録処理装置。

## 3. 発明の詳細な説明

## （産業上の利用分野）

本発明は、画像記録処理装置、さらに詳しく言えば、アナログ方式またはデジタル方式で処理した直角信号をノミリ内に記録し、その記録された直角信号を、レンズの特性またはブレによる既知または未知の点広がり関数 (P.S.F., Point Spread Function) の逆特性を有する直角関数を用いて演算処理し、ピント合わせあるいはブレ

あるいは収差の補正をし、目的の画像を復元する機能を有する画像記録処理装置に関する。

## （従来の技術）

従来から画像記録装置として、ピント合わせ機構、露出機構を有し感光元件に画像を記録するいわゆるカラムと言われている装置、および、VTRの一点校正技術として撮像素子を光電子変換された直角信号を磁気材等より成るメモリに記録するいわゆる電子スチールカメラ装置が知られている。

## （発明が解決しようとする問題点）

前者の装置は、基本的にレンズを通して焦点面に結像された画像、または直角信号自体の記録、再生を目的としているため、その焦点面の画像がピントが合っていない画像であったり、ブレした画像である場合には、それ以上の品質の画像を得ることはできない。

一方、後者の装置は、VTRの直角向上技術としてピント補正を走査信号に、主にハイパスフィルタや補間を用いて行う方法があるが、これは P.S.F. にもとづいた理論的に正確で可逆のものではな

特開昭62-127976 (2)

く、経路上の衰耗がよくなつたように見える場合が多いという程度の複雑的な結果でしかない。

本発明の目的は、ビント合わせるあるいはブレの矯正をすることにより、目的の画像を復元する装置を有する画像記録処理装置を提供することにある。

(問題点を解決するための手段)

前記目的を達成するために本発明による画像記録処理装置は、撮影用レンズと、前記撮影用レンズからの光信号を光電気変換して画像信号を生成する画像素子と、前記画像素子からの画像信号を記憶する記憶部と、前記記憶部に記憶された画像信号に基づいてビンボケあるいはブレあるいは収差による点状がり閾値を有する補正閾値を用いて算出並して画像を復元する算出処理部とから構成されている。

(発明の原理)

まず、本発明の基本になる原理を説明する。ここでは、理解を容易にするために、まず一次元の信号について段階し、次いで、二次元の信号に拡

大して説明する。

第4図は、本発明の基本原理となる入出力システムを示したブロック図である。

インパルスレスポンスが  $h(t)$  である系(ここで、因縁の条件は考えないことにする。)に入力信号  $s(t)$  が入力され、出力信号  $y(t)$  が出力されたとする。このとき、これらの量の間に次式のような関係が成立立つ。

$$y(t) = \int_{-\infty}^t s(\tau) \cdot h(t-\tau) d\tau$$

ここで、\*印はたたき込み積分を示している。

式由より、入力信号  $s(t)$  が、デラックのデルタ関数の場合には、出力信号  $y(t)$  はインパルスレスポンスト  $h(t)$  そのものになる。

$y(t) = s(t) * h(t) = s(t) \cdot \delta(t)$  … 図すなわち、入力信号に  $\delta(t)$  を入力したときの出力を観測することで  $h(t)$  を知ることができます。こうして求めた  $h(t)$  のフーリエ変換を  $H(f) = \int_{-\infty}^{\infty} h(t) e^{-j2\pi ft} dt$  とする。

いま、インパルスレスポンスト  $h(t)$  が既知で

ある系を通り、出力信号  $y(t)$  から、その系への入力信号  $s(t)$  を復元することを考える。

求め入力信号  $s(t)$  のフーリエ変換を  $S(f)$ 、出力信号  $y(t)$  のフーリエ変換を  $G(f)$  とするとき、式由より

$$y(t) = s(t) * h(t) \quad (3-a)$$

↓

$$G(f) = S(f) \cdot H(f) \quad (3-b)$$

$\therefore S(f) = 1/H(f) \cdot G(f) \quad (3-c)$  が成り立つ。ここでは、説明を簡単にするために、 $1/H(f)$  が物理的に存在するものとする(実際には、このままの形では必ずしも存在するとは限らない)。このようにすると、出力信号  $y(t)$  から入力信号  $s(t)$  を復元するには、インパルスレスポンスのフーリエ変換が  $1/H(f)$  なる系を過せばよいことがわかる。

第5図は、本発明の基本原理となる入力信号復元システムの一次元の場合を示したブロック図。第6図(ア)は、前記システムのインパルスレスポンスがガウス関数の例を説明するための図。第

6図(б)は、前記システムのインパルスレスポンスが矩形波の例を説明するための図である。

ここでは、例として2種類のインパルスレスポンスト  $h(t)$  を考える。すなわち、次の各式のようにインパルスレスポンスがガウス関数である系と、矩形波である系を考える。

$$h(t) = [1 / (2\pi\sigma^2)] e^{-t^2/2\sigma^2} \quad (4)$$

$\exp(-t^2/2\sigma^2)$  … 図

$$h_2(t) = (1/\pi) \cdot \text{rect}(t/\pi) \quad (5)$$

式(4)のフーリエ変換はそれぞれ

$$H(f) = \exp(-2\pi^2\sigma^2 f^2) \quad (6)$$

$$H_2(f) = \text{rect}(\pi f) \quad (7)$$

$\sin(\pi f)/\pi f$  … 図

となる。式(4)、(6)に替し、第5図に相当するシステムを図示すると第6図のようになる。

第6図(ア)～(б)は、伝達関数(インパルスレスポンスのフーリエ変換)がそれぞれ

$$H_1(f), H_2(f) \text{ なる系を入力信号が通り変化を受けても、その後に逆特性 } 1/H_1(f),$$

$$1/H_2(f) \text{ の系を通過することで、もとの入力は}$$

## 特開昭62-127976 (3)

号が復元されることを示している。ただし、図から明らかなように、選択性の系は必ずしも物理的に実在するとは限らないが、数学上、計算上は存在する。

以上は、一次元的な説明であったが、それを二次元に拡大した西像復元について説明する。

説明の都合上変数を  $x$ 、 $y$  とし、その二次元フーリエ変換の変数を  $X$ 、 $Y$  とする。

一次元の場合には、ある系にディラックのデルタ関数を入力したときの応答、すなわち、インバ尔斯レスポンスを測定することにより、システムの特性を記述できた。これと同様に、二次元のディラックのデルタ関数、具体的には理想的な点光源をレンズを通して焦点に結像させたときの像を測定すれば、広がりが関数 (P.S.F. Point Spread Function) が求められ、その光学系の特性を記述できる。広義には P.S.F. はブレによる広がりをも含めることができる。

第7図は、二次元的なビンボケの P.S.F. を説明するための図である。

第7図は、点光源の状態を示すもので、第7図 (a)、(b) は合焦点のときで、 $x-y$  平面上で、点 (0, 0)、 $\pm (1, 0)$  となる。第7図 (c)、(d) はピントがずれたときで、二次元のガウス関数状に拡散される。このピントがずれた西像からもとの西像を復元する手順を、前述の第5図 (a) の一次元と同じ手順で説明する。

第8図は、本発明の基本原理となる入力信号復元システムの二次元の場合を説明するための図である。

第8図 (a) が入力の状態で、第8図 (h) に示される二次元のインパルスが原西像である。この累積 (h) が合焦点でないときには、第8図 (b) に示される P.S.F. で拡散され、第8図 (c)、(d) に示されるビンボケ西像となる。このビンボケ西像を  $x$  成分に関する選択性の系 (第8図 (d)、(e)) を通すと、ボケの  $x$  成分の補正された西像 (第8図 (e)、(f)) が復元される。さらに、 $y$  成分に関する選択性の系 (第8図 (f)、(m)) を通すことによりボケの  $y$  成分も

補正され、ボケのない元の点画像 (第8図 (g)、(h)) が復元される。

第7図の例ではレンズの合焦点でないときの P.S.F. が二次元のガウス関数であるが、これは現実的な仮定である。また、この系では原西像を点画像として扱うが、もしこの系が線形 (スパーコード) が成立する系であるならば、対象とする画像を点画像から一般の画像へ拡大することができる。

以上の説明により、レンズの P.S.F. が既知のときは、ある距離で合焦点として撮影、記録した西像から、任意距離の対象物の像を復元できる。これは一次元の式 (1)、(2) で示される第6図 (a) に相当する。

第9図は、本発明の基本原理のブレ西像復元システムを説明するための図である。

ビンボケの場合と同様に、ブレによる西像の復元について説明する。一般的のブレの復元は必ずしも容易ではないが、ここでは説明の都合上、西像が等速直線的に  $x$  軸方向にブレたものとする。こ

の場合、合焦点の点画像は  $x$  方向の直線画像となるので、ブレの量を  $x$  とするとき P.S.F. は  $\text{rect} (x/x_0)$  になる。第8図のビンボケの場合に相当する図が第9図である。

第9図 (a) が入力の状態で、第9図 (f) に示される二次元のディラックのデルタ関数が原西像である。この点画像が、第9図 (b) に示されるブレの P.S.F. により第9図 (c)、(d) に示される複雑な西像となる。この例では津波像は  $x$  成分のみであるから、第9図 (e)、(i) に示される選択性の系を通すことで、もとの点画像 (第9図 (a)、(h)) が復元される。これは一次元の式 (4) で示される第6図 (b) に相当する。

一般的のビンボケやブレはこれらの一例のように单纯ではないが、基本的に以上の考え方を用いて、目的の復元を復元することができる。

## (実施例)

以下、図面等を参照して、実施例について本発明を詳細に説明する。

第1図は、本発明による西像記録処理装置の実

## 特開昭62-127976 (4)

施例を示したブロック図である。

第1において、1はレンズ、2は撮像素子、3はRAM、4はコントロール部、5は演算処理部、6は主メモリ、7は出力端、8はA/D変換器である。

レンズ1は、撮像用のレンズである。撮像素子2は、撮像用の光電気変換素子であり、レンズ1に対して、距離の焦点面に固定されている。レンズ1および撮像素子2の光学系は固定焦点方式になっている。RAM3は、一画面分の画像入力を記憶するメモリが1ないし必要数だけ含まれている。主メモリ6は、RAM3に一時的に搬入された画像情報を転送、記憶するメモリである。演算処理部5は、主メモリ6に記憶されている画像情報を目的の画像となるように演算処理を行い、その演算結果は、主メモリ6に記憶される。以上の操作は、コントロール部4を介して行われる。主メモリ6に記憶されているデータ、あるいはRAM3に記憶されているデータは出力端7より出力される。

次に、本発明による画像記録処理装置の基本動作を説明する。

被写体からの反射光は、レンズ1を介し、撮像素子2上に結像する。

前述のように光学系を無限遠の固定焦点としているのは、ある有限の距離で合像したとき、その前あるいは後のピントが合っていない被写体に対して、ボケた像だけではなくピントの後ビンとの区別できないからである。すなわち、前述の第7回(c) (4)に示すように、もしもある合像状態に対して、前ビンのボケのP S F P(x, y)が

$$\begin{aligned} P(x, y) &= (1/2 \times e^2) \\ &\exp(-(x^2 + y^2) / 2x^2) \quad \cdots (4) \end{aligned}$$

であったとすると、同じボケとなる後ビンのP S F P'(x, y)は

$$\begin{aligned} P'(x, y) &= P(-x, -y) \\ &= (1/2 \times e^2) \\ &\exp(-(x^2 + y^2) / 2x^2) \\ &= P(x, y) \quad \cdots (5) \end{aligned}$$

は直ちに主メモリに転送される。

RAM3は、半導体メモリで高速であるがあまり大容量をとれないのに對し、主メモリ6は磁気、光、光磁気等のメカニカルな系を含むもので、大容量であるが高速ではない。そこで、連続の連写を考慮し、RAM3を必要数設けておき連写等のとき、切り替えて使用する。

ちなみに、カラー一画面当たり14 bitsを割当てる一画面当たり

$$14 \text{ bits} \times 1024 \times 1024 \quad \cdots (6)$$

$$= 1.468 \times 10^9 \text{ bits} \quad \cdots (6)$$

必要になる。また、一画面を1/1000 secで処理、記憶するには

$$1 \text{ msec} = 1024 \times 1024 \times T$$

$$T = 9.5367 \times 10^{-10} \text{ sec}$$

$$1/T = 1.0486 \times 10^9 \text{ Hz} \quad \cdots (11)$$

となり、約1GHz以上のクロックでA/D変換器8、RAM3を動作させる必要がある。このクロックは、パラレル処理で対応することもできる。RAM3より主メモリ6に転送されたデータは

となり、前ビンか後ビンかが区別できない。実際には、レンズの分散特性により前ビンと後ビンではPSFは異なる場合もあるが、ボケの基本的な考え方においては、前ビンと後ビンは区別することではない。このため、光学系を有する距離の固定焦点とした状態で撮影し、画像演算処理を行い、その前あるいは後の位置で光学系を合焦点を合わせ直すと、それがない相対する後あるいは前の位置が合焦点になる。この場合には、2つの距離でピントが合うことになる。

撮像素子2は、目的の画像処理に十分な情報信号を得る分散性を有している。例えば、正方形の画面で、たとえそれぞれ1024×1024画素とする。そのノクロでは1024×1024画素であるが、カーラーではその3倍の容量が必要になる。

撮像素子2上に結像された画像は、光電気変換され、A/D変換器8によりコード化されてRAM3に記憶される。この処理は高速で行われる必要があるので、A/D変換器8や記憶は必要に応じてパラレルに処理される。このRAM3の内容

## 特開昭62-127976 (5)

演算結果図5で二次元FFT (Fast Fourier Transform) される。FFTは、DFT (Discrete Fourier Transform) の一手店である。もともと、RAMあるいは主メモリには、音楽などのデータ、すなわちDiscreteのデータが入力されているので演算には都合がよい。

DFTは、一次元の信号の場合には、基本的に第2図に示される演算のことである。

第2図および第3図は、本発明による画像記録処理装置の動作を模索するための図であって、第2図は一次元の場合、第3図は二次元の場合を示した図である。

時間領域でNTsec以内の時間存在する関数をs(t)とする(第2図(a)の点線内)、この関数をTsecごとにサンプルし、かつ、それをNTsecごとに統計する。これを式で表わすと

$$(s(t) \cdot 1/T) \otimes (1/NT) \quad \cdots (12)$$

$$= (1/NT) \otimes (1/T) \quad \cdots (13)$$

となる。ここで、(1/T)・(1/NT) =  $\frac{1}{NT}$  である。s(t)は、ディラックの

デルタ関数である。式(12)をフーリエ変換したものがDFTであり、この式(12)より直ちに

$$S(f) = \sum (Tf) \cdot s(Tf) \quad \cdots (13)$$

が得られる。これを、図示したものが第2図(b)である。ただし、第2図(b)では本来複数であるS(f)を、図を単純にするために絶対値で示してある。s(t)は、存在する時間がT以内に制限された関数であるので、そのフーリエ変換S(f)は、周波の帯域に広がってしまう。実際にはパラメータを決めるには、第2図(b)よりS(f)が  $(\pm 1/2T)$  Hzで充分に小となるようにサンプリングレートTを定める。

DFTを二次元に拡大するときのようになる。ある二次元の画像関数をf(x, y)とする。

$$\begin{aligned} & \{ \{ \{ f(x, y) \cdot (1/x) \otimes (1/x) \} \\ & \quad \cdot (1/Nx) \} \otimes (y/Ny) \} \\ & \quad \cdot (1/Ny) \cdot (1/Nx) \quad \cdots (14) \end{aligned}$$

$$\begin{aligned} & \{ \{ f(X, Y) \cdot (1/x) \otimes (1/x) \} \\ & \quad \cdot (1/Nx) \} \otimes (y/Ny) \quad \cdots (15) \end{aligned}$$

第3図(a)は、Nx, Ny, Myの区間内のみに存在する画像信号f(x, y)と、その画像信号f(x, y)がx軸方向にNx, y軸方向にNy, 間隔の周期で繰り返したx, y, z領域(実像)の画像(信号)である。これに二次元DFTを行い空間周波数領域に変換したものが、第3図(b)である。X軸方向に1/x, Y軸方向に1/y, zの階級の周期関数になっている。これらの関係を式で示したものが式(14) (15)である。

もし、画像信号f(x, y)がピントが合っていないボケた画像の信号であるならば、DFTで変換された信号F(X, Y)に対し、ボケのPSFの逆特性となるOTF (Optical Transfer Function) G(X, Y)をかけてボケの補正を行う。目的の被写体までのレンズのPSFを第8図(b) (i)に示すように

$$\begin{aligned} h(x, y) &= (1/2\pi e^2) \\ & \cdot \exp(-(x^2 + y^2)/2e^2) \quad \cdots (16) \end{aligned}$$

とするとボケ修正のOTFは、同じく第8図(d) (i) (l) (m)より

$$\begin{aligned} G(X, Y) &= \exp(2\pi^2 e^2 X^2) \\ & \cdot \exp(2\pi^2 e^2 Y^2) \quad \cdots (17) \end{aligned}$$

になる。式(17)よりOTFを補正し、ピントを目的の距離に合わせなおすには、空間周波数領域で

$$F(X, Y) \cdot G(X, Y) \quad \cdots (18)$$

とすればよい。式(18)を二次元逆DFTを行え

ば、目的の復元画像(信号)が得られる。

アレた画像に関するても同様な演算操作で画像を復元できる。

復元の演算を行うには、x-y領域でたたみ込み処理で行う方法と、空間周波数領域での計算で行う方法を考えられるが、PSFの逆特性の逆フーリエ変換が困難であったり、たたみ込み積分に計算時間を要することから、空間周波数領域で計算熱処理を行う。

## 特開昭62-127976 (6)

ボケやブレの正特性の関数は、それぞれ  
 $\exp(-2\pi^2 x^2 X^2) - \exp(-2\pi^2 x^2 Y^2)$   
 $(x \times_0 X) / \sin(\pi x_0 X) \dots (20)$

である。X→0、Y→0のときには $\approx$ となり、通常のアナログ経路的な手段では実現が困難であるが、計算機で処理することができる。

## (発明の効果)

以上詳しく述べたように、本発明によれば、画像記録装置の光学系によるピント合わせが不要であり、操作が簡単になる。つまり、今まで不可能であった操作後に、任意の被写体にピントを合わせなおすことができる。また、ブレた画面からブレのない元画像を復元することができる。

さらに、レンズの収差を補正することができ、逆に、画像にレンズの収差の影響を加えることもできる。さらにまた、画像の特徴抽出等の「画像処理」を行うこともできる。

なお、本発明の画像記録処理装置は、ビデオデータ等、他のメディアにも接続できる。

## も画面の簡単な説明

第1図は、本発明による画像記録処理装置の実験例を示したブロック図である。

第2図および第3図は、本発明による画像記録処理装置の動作を説明するための図であって、第2図は一次元の場合、第3図は二次元の場合を示した図である。

第4図は、本発明の基本原理となる入出力システムを示したブロック図である。

第5図は、本発明の基本原理となる入力信号復元システムの一次元の場合を示したブロック図。

第6図(a)は、前記システムのインバ尔斯レスポンスがガウス関数の例を説明するための図、第6図(b)は、前記システムのインバ尔斯レスポンスが矩形波の例を説明するための図である。

第7図は、二次元的なピボケのPSFを説明するための図である。

第8図は、本発明の基本原理となる入力信号復元システムの二次元の場合を説明するための図である。

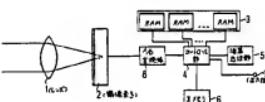
第9図は、本発明の基本原理のブレ画像復元シ

ステムを説明するための図である。

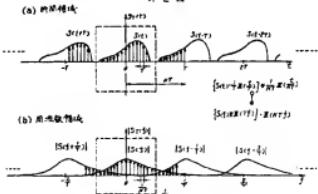
1…レンズ 2…撮像電子  
 3…RAM 4…コントロール部  
 5…演算処理部 6…主メモリ  
 7…出力端 8…A/D変換器

特許出願人 京セラ株式会社  
 代役人 井口尚義

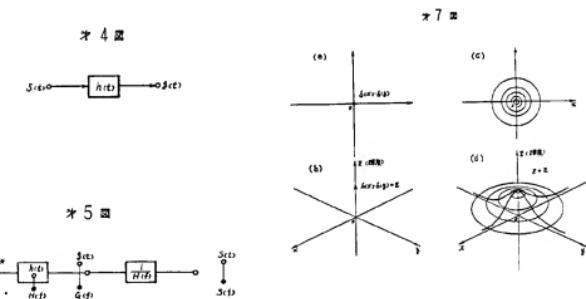
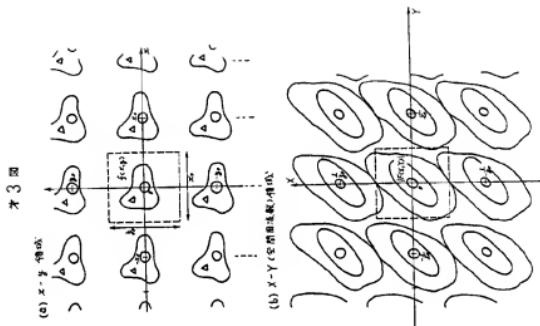
## 第1図

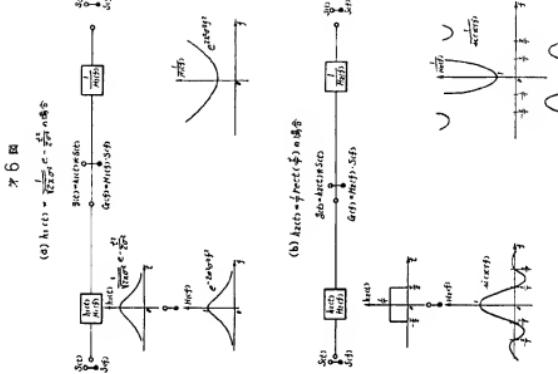


## 第2図

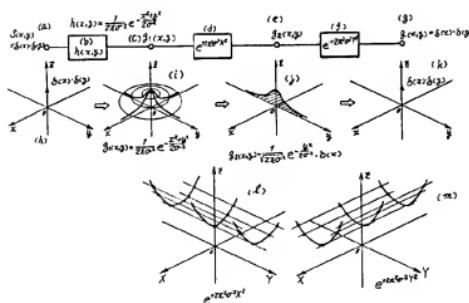


特開昭62-127976 (7)



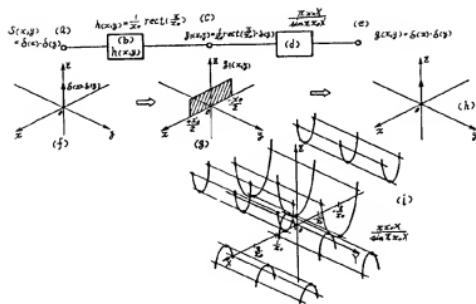


78



特開昭62-127976 (9)

図 9 図



## 第三 発光 半導 二三 類

## 補正の内容 (特開昭60-268694)

昭61年3月25日

特許庁監査課

## 1. 事件の表示

昭60年特許第268694号

## 2. 発明の名前

複数記録装置

## 3. 補正をする者

事件との関係  
特許出願人住所  
京セラ株式会社

## 4. 代理人

住所  
〒160 東京都新宿区歌舞伎町2丁目4-5番7号  
大富ビル4F TEL 03-329-1094氏名  
0514 井口 井口

## 5. 補正命令の日付

自發

6. 補正の対象  
明細書および図面方式

## 7. 補正の内容

## (1) 明細書第4頁第9行目の

$$f(x, t) = \int_{-\infty}^{\infty} s(\tau) \cdot h(t - \tau) d\tau$$
を  $f(x, t) = \int_{-\infty}^{\infty} s(\tau) \cdot h(t - \tau) d\tau$ 

に補正する。

## (2) 明細書第4頁第19行目の

 $f(x, t) (0 \rightarrow h(t))$  を $f(x, t) (0 \rightarrow h(t))$  に補正する。

## (3) 明細書第5頁第9行目の

 $f(x, t) = 1/H(t) \cdot G(t)$  を $f(x, t) = (1/H(t)) \cdot G(t)$  に

に補正する。

## (4) 明細書第8頁第12行目の「二次元のインバ尔斯」を「二次元のディラックのデルタ関数」に補正する。

## (5) 明細書第11頁第8行日の「無限遠の焦点面」を「無限遠の被写体の合成の焦点面」に補正する。

## (6) 明細書第12頁第5行日の「馬鹿の固定

1986.3.25  
-449-

特開昭62-127976 (10)

焦点」を「断面進の被写体に対する固定焦点」に補正する。

(7) 初詰第12頁第5行目の「距離で合焦したとき」を「距離の被写体で合焦したとき」に補正する。

(8) 初詰第12頁第11行目から同第20行目の「 $P(x, y)$  が…… $P(x, y) = \dots$ 」を以下のようにおき正する。

$P(x, y) = (1/2\pi\sigma^2) \exp(-((x^2 + y^2)/2\sigma^2))$  であるとすると、同じ値となる後ビンのPS

$P(x, y) = h(-x, -y)$

$= (1/2\pi\sigma^2)$

$\exp(-((x^2 + y^2)/2\sigma^2))$

$= h(x, y) \dots$  (10)

(9) 初詰第13頁第5行目の「距離の」を「距離の被写体に対し」に補正する。

(10) 初詰第15頁第17行目から同第20行目の「 $[s(1) \dots \delta(1)]$ 」を以下のとおり

補正する。

$[s(1) \dots (1/\sqrt{T}) \dots \delta(1/\sqrt{T})]$

$\dots (1/\sqrt{NT}) \dots (1/\sqrt{NT}) \dots$  (12)

となる。ここで、 $(1/\sqrt{T}) \dots (1/\sqrt{T})$

$\dots \delta(1/\sqrt{T}) \dots \delta(1/\sqrt{T})$

(11) 初詰第16頁第8行目の「 $T \dots c$ 」を

$T \dots \sec J$  に補正する。

(12) 初詰第16頁第17行目から同第20行

目の「 $[s(1) \dots (1/\sqrt{N}x_0) \dots$ 」を以下のようにおき正する。

$[s(1) \dots (1/\sqrt{N}x_0) \dots (1/\sqrt{N}x_0)]$

$\dots (1/\sqrt{Ny_0}) \dots (1/\sqrt{Ny_0})$

$\dots (1/\sqrt{Mx_0}) \dots (1/\sqrt{Mx_0}) \dots$  (14)

(13) 初詰第17頁第7行日の「 $x_0, y_0$ 」を「 $x \dots y$ 」に補正する。

(14) 初詰第20頁第3行目から同第4行日の「水発明による画像記録処理装置の動作」を「DPT」に補正する。

(15) 初詰第20頁第7行日の「基本原理とな

る」を「基本原理を説明する一次元の」に補正する。

(16) 添付図面の第2図(a), 第3図(a), 第4図, 第5図, 第6図(a), (b), 第7図(a), 第8図, および第9図を別添の第2図(a), 第3図(a), 第4図, 第5図, 第6図(a), (b), 第7図(a), 第8図, および第9図にそれぞれ補正する。

以上

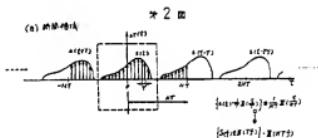


図2 図

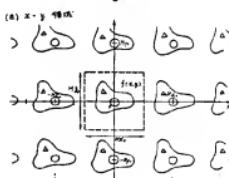


図 4 図

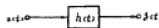
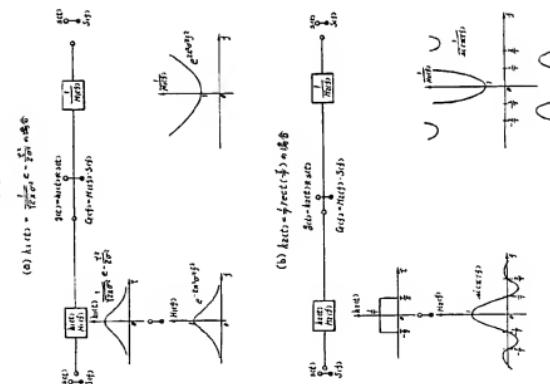


図 5 図



図 6 図



特開昭62-127976 (12)

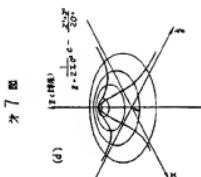


図 8

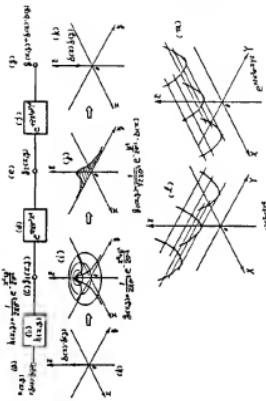


図 9

